



クモやアリなどの身近な生物の素朴な疑問を解明

現代社会学部 現代社会学科 教授 **中田 兼介** なかた けんすけ

日本で数少ない“クモの生態や行動”の専門家
生物の多様性を学び、常識を疑える人材を育成

コメントできる
研究領域

クモの研究

自然環境と生態学

多様性の生物学

動物行動学

京都女子大学は、教員の研究活動や社会連携など“社会のための女子大学”の姿をお伝えするニュースレターを発信しています。今回は、動物行動学を専門とし、特にクモの研究に取り組む現代社会学科の中田兼介教授をご紹介します。

■ギンメッキゴミグモに注目し、研究者の少ないクモの研究に取り組む。

野外や家の中などあらゆるところでクモを見かけるにもかかわらず、国内でクモを専門とする大学の常勤研究者は、10人程です。中田教授はクモの中でも日本でよく見かけるギンメッキゴミグモに注目しており、メスの交尾器の一部がオスによって交尾後に破壊されることを発見しました。現在は、このクモが網を張る様子を研究用のカメラで記録し、網が形作られる過程の解明を進めています。ほとんどのクモが頭を下にして網を張りますが、このクモは頭を上にして網を張ります。クモの中で例外的な行動をするこのクモの研究を続けることで、中田教授はクモ全体の謎を解き明かそうとしています。



ギンメッキゴミグモ

■小学生が読んでも楽しめる生物の本を執筆。クモのトリビアや生物の萌えポイントを紹介した本を出版。

中田教授は、誰が読んでもわかりやすく楽しめる、生物の本を執筆しています。2019年に出版した『クモのイト』は、クモが宇宙実験の対象になっている事、地球全体のクモが年間で食べるエサの総量が4～8億トンと全人類の体重に匹敵する事、クモの子作りについてなど、“クモ業界”の研究内容を、ユーモアを交えながらわかりやすく紹介しています。また、2022年に出版した『もえる！いきもののりくつ』は、アリ、オタマジャクシ、カメ、タコなど、生物の“萌えポイント”を紹介しており、小学生が読んでも楽しめる内容です。

■人間の“常識”は生物のバリエーションの1つ。生物の多様性を学び、自分を客観的に捉える。

中田教授のゼミでは、生物の生態、進化、多様性などに関わる問題を扱い、野外観察、野外・室内での実験などを行っています。研究室前の傘立てには、授業で大学の裏山に登る際に学生たちが使う虫取り網が何本もさしてあります。学生が虫取り網を持って楽しそうに歩く光景は、学内で目を引いています。学生は、クモ、アリ、ダンゴムシ、外来植物など、身近な生物や植物に関する素朴な疑問の解明に取り組んでいます。

人間は口から食物を摂取し体内で消化しますが、クモはエサの体に消化液を注入し、体をドロドロした液体にしてから吸うという方法で食物を摂取します。食べること1つとっても、人間のやり方がすべてではないことがわかります。中田教授は、生物多様性の学びを通じ、学生が当たり前だと思っている既成概念を取り払って、常識を疑える人材を育成しています。

中田兼介（なかた・けんすけ） Profile

<http://gyouseki-db.kyoto-wu.ac.jp/Profiles/2/0000158/profile.html>

- 略歴** 1967年生まれ。1995年3月京都大学大学院理学研究科動物学専攻博士後期修了、博士（理学／京都大学）。東京経済大学現代法学部助教授・准教授、京都女子大学現代社会学部准教授などを経て、2015年4月より現職。
- 論文** 『Relationship between body colour and microhabitat breadth in an orb-web spider』（単著/2021年/Biological Journal of the Linnean Society）
『Female genital mutilation and monandry in an orb-web spider』（単著/2016年/Biology Letters）
- 著書** 『もえる！いきもののりくつ』（単著/2022年/ミシマ社）『クモのイト』（単著/2019年/ミシマ社）
『まちぶせるクモ ―網上の10秒間の攻防―』（単著/2017年/共立出版）

<本件に関する報道関係者の皆様からのお問合せ先>

- 京都女子大学入試広報課 北山・堀川・竹縄 TEL: 075-531-7054 FAX: 075-531-7222
- 京都女子大学広報デスク（プラザینگ・ボート内）福嶋・小宮・井上 TEL: 06-4391-7156 FAX: 06-4393-8216
- 京都女子大学HP <https://www.kyoto-wu.ac.jp>